

(別紙)

様式第1号(第5条関係)

会 議 録

会 議 の 名 称	第3回『びほろ』みらいまちづくり会議
開 催 日 時	平成26年11月12日(水) 18時30分 開会 20時00分 閉会
開 催 場 所	しゃきっとプラザ 集団健診ホール
出 席 者 氏 名	別紙のとおり
欠 席 者 氏 名	別紙のとおり
事務局職員職氏名	【本部員】 平井総務部長、那須総合計画主幹、 竹下総合計画担当主査、多田住民活動担当主査、遠藤政策担当主査 浅野交通安全担当主査、小澤政策担当、大江住民活動担当 【説明員】 日本コンサルタントグループ：山口研究室長、中村研究員
議 題	1 開 会 2 将来人口推計について 3 まちの将来像について <ワークショップ> 4 次回会議について 5 閉 会
会議の公開又は 非公開の別	公 開
非 公 開 の 理 由 (会議を非公開とした場合)	—
傍 聴 人 の 数 (会議を公開した場合)	1名(報道機関)
会 議 資 料 の 名 称	・レジュメ ・美幌町の将来人口の見通し(推計結果) ・美幌町の国勢調査人口の実績と各種推計結果(総人口) ・美幌町総合計画将来像 ・基本目標のイメージ ・基本計画検討シート
会議録の作成方針	☐ 録音テープを使用した全部記録
	☐ 録音テープを使用した要点記録
	☒ 要点記録

発 言 者	審議内容（発言内容、審議経過、結論等）
菅野会長	＜レジュメの次第に沿って進行＞ 1 開 会 時間になりましたので、これより、第3回『びほろ』みらいまちづくり会議を始めます。本日の会議内容につきましては、お手元に配付しております次第にありますとおり、将来人口推計についての説明、まちの将来像についてのワークショップ、次回会議についての事務連絡、以上であります。 開会に際しまして、本日の会議終了時刻を決めたいと思います。本日の会議終了時刻は午後8時までにはしたいと思いますが、ご異議ありますでしょうか。 （「異議無し」の声あり） 菅野会長 無いようですので、これから会議を始めます。 2 将来人口推計について 菅野会長 次第の2番、将来人口推計について、事務局より報告願います。 那須総合計画主幹 時節柄お忙しい折、ご出席ありがとうございます。本日は、ワークショップを開催する前に将来人口推計についてコンサルより説明させていただきます。将来の人口推計については、国の機関によるものなど様々なものがありますが、一部報道等で公表され、皆様もご存知かとも思います。 今回は、第6期美幌町総合計画策定に際し、コンサルが美幌町の人口動態を元に人口推計を実施しておりまして、その内容を説明するものです。 現状の減少率を鑑みて推計されたものですので、計画終了年度近くの推計値は、かなり人口が減少しております。しかし、この数値はあくまで今の人口動態等を元にしており、人口減少に対する対策等を講じていない、いわば、何もしなかった場合の数値であります。また、現在皆様で作りに上げているこの総合計画における人口の「目標値」、例えば「何万人を目指す」といった目標人口につきましては、これから議論していくものです。更には、各部会による基本計画の議論の際も、人口減少問題については全部会での共通項目となっております。 よって、今回の説明は、「この推計では、将来このような人口が見込まれている。」「どのような推計方法においても、人口が減少していく傾向にあること。」「それに対する対策をこれから全体で議論し、目標を立てていく。」そのような捉え方でお聞き頂ければと思います。 それでは、内容についてコンサルから説明を行います。 日本コンサルタントグループ 山口氏 <資料に基づき説明> お手元に配布してある「美幌町の将来人口の見通し（推計結果）」という資料についてご説明します。将来人口については、本日の検討事項

発 言 者	審議内容（発言内容、審議経過、結論等）
（引き続き） 日本コンサルタント グループ 山口氏	ではありませんが、今後検討する基本構想において、目標年次における将来人口を設定する予定であり、また、基本計画においても、目標人口を考慮した施策の検討が必要となるので、推計結果の概要をご説明しておきたいと思います。 なお、今回の推計結果は、あくまでも、近年の人口増減の状況が今後も継続した場合…ということを前提とした推計結果であり、これがそのまま目標人口になるものではありません。 資料1ページ目の上段をご覧ください。まず、今回の推計方法について簡単にご説明します。今回の推計は、国勢調査結果を用いた「コーホート変化率法」により推計したものです。「コーホート」とは、「同じ期間に生まれた人口の塊（同一出生集団）」を意味し、男女別・年齢5歳階級別人口ごとが「コーホート」となります。そして、それぞれの「コーホート」ごとに5年間の増減率（変化率）を算出して、今後もその率が一定であると仮定し、直近の国勢調査年から5年おき（国勢調査年）の男女別・年齢5歳階級別人口を推計するもので、総人口は、男女別・年齢5歳階級別の推計値を合算したものです。中段の表に示したように、例えば、平成7年の男性・0～4歳の人口の塊は、5年後の国勢調査年である平成12年には5～9歳に移行し、さらに5年後の平成17年には10～14歳に移行します。そして、その間の人口増減は、転入・転出と死亡により決定されます。5年おきに実施される国勢調査は、現時点での最新データ（直近値）が2010年（H22）です。そして、2005年（H17）から2010年（H22）の直近5年間の変化率を用いたのが「最新変化率」、さらに5年、2000年（H12）までさかのぼり、2回分の変化率を算出し、その平均値を用いたのが「2回平均変化率」、さらに5年、1995年（H7）までさかのぼり、3回分の変化率を算出し、その平均値を用いたのが「3回平均変化率」で、今回はこの3種類の変化率を用いて、3種類の推計を行いました。表の下に記載したとおり、2015年（H27）の男性・5～9歳の「推計値A」は、2010年（H22）の男性・0～4歳の「実績値A」×[男性・0～4歳→5～9歳の変化率]で算出します。ほかのコーホートも同様の方法により算出しますが、0～4歳のみ、一定年齢層の女性の数に対する比率（子ども女性比）により算出します。 コーホート変化率法による推計結果を下段に一覧表で示しました。2010年（H22）までが国勢調査の実績値で、2015年（H27）以降が推計値になります。先ほど説明した3種類の推計結果を並べて記載していますが、「最新変化率推計」は、2005年（H17）から2010年（H22）までの直近の変化率①を用いたもので、これは、過去5年間分の人口動態実績が反映されたものとなります。「2回平均変化率推計」は、2000年（H12）から2005年（H17）の変化率②を合わせた2回分の変化率の平均値を用いたもので、これは、過去10年間分の人口動態実績が反映されたものとなります。そして「3回平均変化率推計」は、さらに1995年（H7）から2000年（H12）の変化率③を合わせた3回分の変化率の平均値を用いたもので、これは、過去15年間分の人口動態実績が反映されたものとなります。いずれの推計も、美幌町の過去5年から15年間の実際の人口動態、つまり、出生・死亡、転入・転出状況だけが反映されたものであり、3種類の推計結果が非常に近い数値で表れていることは、少なくとも過去15年間は、美幌町において、将来の人口推計に影響が及ぶような特殊な人口動態、例えば、大規模な住宅開発による大量の転入や、自然災害

発 言 者	審議内容（発言内容、審議経過、結論等）
（引き続き） 日本コンサルタント グループ 山口氏	などによる多くの町外移転などがなかったことが想定され、これまでのような状況が今後も続けば、このような推計結果になるということの妥当性があると言えます。今回の第6期総合計画の目標年度は2026年（H38）です。推計値は、国勢調査年の5年おきにしか算出されませんが、2025年（H37）の翌年なので、直近の実績値である2010年（H22）の21,575人が、各推計ともに16,000人台になると推計されています。 2ページ目では、「2回平均変化率」による推計結果を年齢3区分別に示しました。上のグラフでは、年齢3区分別の人口と総人口を実数で示しており、2010年（H22）までが国勢調査の実績値、2015年（H27）以降が推計値です。一番上の黒丸の太い実線グラフが総人口で、先ほども説明したとおり、過去から将来に向けてほぼ一定に減少していくことが示されています。白抜き四角のマークが15～64歳の生産年齢人口、淡く丸いマークの点線が0～14歳の年少人口で、いずれも一貫して減少していきます。黒い三角のマークが64歳以上の老年人口で、2000年（H12）から年少人口を上回り、一貫して増加してきましたが、団塊の世代もすでに高齢期を迎え、2020年（H32）をピークに、その後は高齢者の数も減少に転じることが見込まれています。これまでは、年少人口と生産年齢人口が減少しながらも、老年人口が増加していましたが、近い将来には老年人口も減少期に入り、総人口の減少が加速することが見込まれます。下のグラフでは、年齢3区分別人口を構成比（100%の帯グラフ）で示しました。年少人口と生産年齢人口の構成比の縮小、老年人口構成比の拡大が今後も継続し、第6期総合計画の目標年度に近い2025年（H37）には、老年人口の構成比が40%に近づく一方、年少人口の構成比は10%を切ることが推計されています。 3ページ目では、国勢調査では把握できない人口動態（出生・死亡、転入・転出）の状況を、住民基本台帳のデータからグラフで示しました。ここでは、北海道市町村課の公表数値を使用しています。上段のグラフでは、2005年（H17）以降の年間の出生・死亡、転入・転出の実績値をグラフで示しています。美幌町では、出生・死亡者数に比べて、転入・転出者数の方が大幅に多くなっています。上の2本のグラフが転入・転出で、2005年（H17）を除いて、転出が転入を上回る状況が続いています。転入者数は緩やかな減少傾向が見られ、転出者数は、近年は1,000人弱でほぼ横ばいです。下の2本のグラフが出生・死亡で、近年は死亡者数が出生者数を上回っています。出生者数は年間160人前後でほぼ横ばい、死亡者数は200名を越え、緩やかな増加傾向が見られます。下段のグラフでは、人口動態の状況を、転入―転出の「社会増減」と、出生―死亡の「自然増減」、そして、それらすべてを差し引きした年間の「人口増減」をグラフで示しました。一番上の三角マークのグラフが出生数から死亡者数を引いた「自然増減」で、近年は80名前後のマイナス（死亡超過）で推移、上から2番目の淡い四角いマークのグラフが転入者数から転出者数を引いた「社会増減」で、年による差はあるものの、近年は200名前後のマイナス（転出超過）となっています。その結果、全体では、年間に250～300人の減少となっています。 最後に、別紙の「参考」と記載されたA4判1枚の資料をご覧ください。人口推計はいくつもの機関が行い、公表していますが、全国・都道府県・市町村の全国統一の推計として、国の機関である（国立行政法人）日本社会保障・人口問題研究所（以下「社人研」）の推計があり、国勢

発 言 者	審議内容（発言内容、審議経過、結論等）
（引き続き） 日本コンサルタント グループ 山口氏 菅野会長 菅野会長	調査結果を受けて5年おきに公表しています。社人研の推計も、国勢調査結果をベースとするコーホート推計ですが、先ほど説明した変化率法とは異なり、人口増減をもたらす各種の要因を独自に設定（仮定）し、推計しています。表の一番上は、国勢調査の2010年（H22）までの実績値で、2段目が、2010年（H22）の国勢調査結果を受けて、社人研が昨年（H25）12月に公表した美幌町の推計値です。表の中で、下の3つの「ニッコン」と書いてあるのが、今回私たちが行った3種類の変化率法による推計ですが、これに比べて社人研の推計は、減少はしているものの多めに（減少数が少なく）推計されています。これは推計方法の違いによるもので、今日は推計方法の違いについての詳しい説明は省略しますが、差が生じた最も大きな理由は、社人研の推計が、大都市への人口集中など、これまでの人口移動が今後収束することを仮定している点だと考えられます。つまり、美幌町は、転入・転出において転出超過の状態にありますが、今後、若者が中心となっている転出超過数が大幅に減少していくことを仮定した推計なのです。これに対して、そのような考え方はいかなものか…と別の推計値を今年（H26）の5月に公表したのが、表の3段目に示した日本創生会議（人口減少問題検討分科会）の推計値です。分科会の座長が元総務大臣の増田さんだったことから、増田レポート、増田ショックなどとも呼ばれ、ご存じの方もいるのではないかと思います。日本創生会議の公表数値は、社人研が推計で仮定した「今後の人口移動の収束」がない場合（移動状況が近年と同様の場合）の推計値であり、むしろ、変化率法に近い数値となっています。 人口推計には様々な方法や考え方があり、一概に「どの推計方法が最も正しい」とは言えません。ただし、美幌町の場合、少なくとも過去15年以内の3種類の変化率を用いた推計値に大きな違いがないことから、「近年の人口動態の状況が今後も継続した場合」の推計値として、変化率法による推計値は妥当性が高いと思われます。 ただ今、事務局より経過について報告がありましたが、質疑などありますでしょうか。 無いようですので、次に進みます。 3 まちの将来像について＜ワークショップ＞ ※「まちの将来」について、各部会でワークショップを行いました。計画期間終了時に“なっていて欲しい美幌町の姿”“みられる光景”また、それらを表現する“キーワード”について、委員が各自記入し、部会ごとにとりまとめ、内容を発表した。 ※各部会がとりまとめた協議結果については別紙のとおり。 4 次回会議について 次第の4番、次回会議について、事務局より報告願います。

